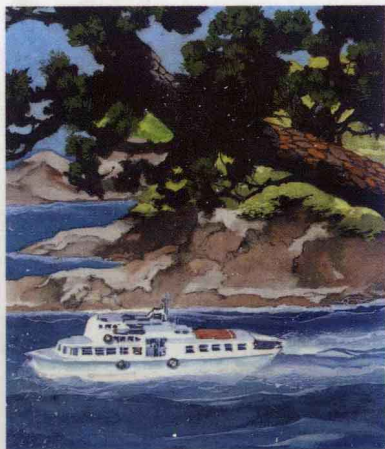


瀬戸内海の惨劇

蒼井 雄



国書刊行会

探偵クラブ
detective club collection

瀬戸内海の惨劇

蒼井雄



国書刊行会

探偵クラブ

瀬戸内海の惨劇

一九九二年九月二〇日初版第一刷印刷

一九九二年九月二五日初版第一刷発行

著者 蒼井 雄

装 幀 高麗隆彦

発行者 佐藤今朝夫

発行所 株式会社国書刊行会

東京都豊島区巣鴨三―五―一八

電話〇三(三九一七)八二八七 振替東京五一六五二〇九

印刷 株式会社キャップス・セイユウ写真印刷株式会社

製 本 大口製本印刷株式会社

ISBN4-336-03365-X © Masako Fujita 1992

目次

瀬戸内海の惨劇

5

黒潮殺人事件

217

戦前本格派の孤峯

257

紀田順一郎

瀬戸内海の惨劇

瀬戸内海の惨劇

第一章 墓石の島

多度津で又も遊覧客を積み込んだ船は、その日も午後三時二十分になると下津井の大横を出て、海のハイクと陸の眺望に疲れた人々を載せ、国立公園の最後の遊覧コースを辿り始めた。

下津井の港で船を捨て、始めて大地を踏む人のように楽しく、動かぬ砂浜や岩石の上を、鷺羽山の眺望台まで歩いた遊覧客達は、今度は山上から見る海の公園の壮観を、心ゆくまで貪ったのだったが、その山も、今は軽い機関の響きと共に、次第に遠去かっていた。

鐘秀峯の突兀たる岩壁も、久須見鼻の奇岩も、またそれらに抱かれて、ただ一色の白を描く砂浜も、今はただ一筋、鮮かに描き分けられた浪路の彼方に、茫漠と薄れ始めているのだ。

しかし、旅客達は、もう下津井のそうした景色は未練なく振り捨てていた。と言うのも、大体なら見飽きても好い筈の島々が、またも新しい変った姿で、次から次へと、応接の暇も無い程、現われていたからであつた。

櫃石島と松島、釜島の間を抜けると、直ぐ舢に、岩黒島の岩礁が迫っていた。碧い海の水までが、その岩に黒く染められている。が船は其処で巧みに舢先を転ずると、今度は間島の岩鼻に突かかるよ

うに進んで行くのだ。

遙か霞の中に、讃岐富士の秀麗な姿が見えた。またそれを頂きとして、重畳たる起伏が紫霞む中に起伏していた。金刀比羅宮のある象頭山の姿も見えた。

崔嵬たる岩壁や、翠緑の松の蔭を濃くたたえた海原には、眠たげな初夏の陽が、燦々たる光をまき散らし、あたかも風に煽られる雲母のごとく、キラキラと眩しく輝く海面からは、そよかな微風が、潮の香を伴って立ち昇り、爽やかに肌を擦りつつ、吹き過ぎてゆく。

帆をふくらませた船が、黒と褐色と緑と碧の色調の中に、快い白の階律を奏でながら眼に見えぬ速さで動いているのも、そのまま美しい音楽だ。

が南波は、疲労と共に、眠気さえ覚え始めていた。そうした景色を飽かず眺めていながら、饒舌り疲れた様に、沼野警部が黙りこんでしまつてからは、一層眠たかった。快い睡魔が、ともすれば、現実と夢の境界に意識を朦朧とさせた。機関の律動的な響きさえ、彼に睡魔を誘うのだった。

船は再び舳先を転じた。

塩飽諸島の島々は、相も変わらず無数の岩を撒き散らして、流水の如く右に左に迫つて来る。

「あれが羽佐島ですよ。その向うが与島、そら、白い燈台が見えるでしょう」

思い出したように沼野警部は説明し始めた。

南波は、その言葉に呼び醒まされたように、うすらかな眸を左舷のほうに投げかけた。

遙かに袴の腰板のごとく横たわる屋島の姿が見える。がその前には、依然として重畳した翠の島が、少しずつ動いていた。そして成程絵に見るような白い燈台が一つ、くつきりと浮いていた。

しかし、その時南波は、あたかも白い石碑を二つ三つ、無難作に立て並べたような小島に、ふと視線を奪われた。それと言うのも、その姿の異様さにあるのだが、それよりも、むしろ遊覧船が物憂げな汽笛を吹き鳴らしたために、それに驚かされたのであろうか、数羽の真黒に見える鳶とびの群が、一斉にその墓石の上から飛び立ったからであつた。

だが、なんと沢山な鳶だろう。しかもこの海辺の掃除人達は、いずれも悠々と蒼空に輪を描いている。

五月の空は明るく晴れていた。そして散在した島々の上に舞う鳶の姿は、如何にも長閑のどかだつた。が南波には、余りにも多いその数に、何故となく不安な気がした。

刻々と船は、その墓碑の島に近附いてゆく。が一度飛び立った鳶の群は、間も無くその白い岩の上へ舞い戻つて来た。そして見る見る、岩の頂きを黒く染め出した。

又しても不快な予感がする。

南波は急に立ち上つて、左舷の手摺に凭よつた。そして瞳を据えて、じつと島の頂きを眺めた。

何か黒いものがある。他の島々は、ことごとく緑濃い松に包まれているのに、この小島だけは、ポツンと置き忘れられたように、真白で、草一本見えないのだ。だから、南波の眼には、直ぐ鳶の餌が黒く映つて見えたのであつた。

「沢山な鳥ですな。あ、鳶ですな——あれは」

沼野警部も立つて来て、同じく無気味な島に視線を注いだ。

「一体、鳶は何を啄ついているんでしょう」

「さあ。——何だろうね。僕も、先刻から、それを不審に思ってるんだが……」

船は一層近附いた。がそれも寸刻で、再び島は白浪の後に遠ざかってゆく。

しかし、その寸刻で南波の表情は俄に變つていた。それと言うのも、船が最も島に近附いた時に、双眼鏡を手にした南波の眸に、その墓石のような島の上に横たわる鳶の餌が、いともはつきりと見えただからであつた。

「な、なんです？ あれは……」

沼野警部は、南波の異様な表情を見ただけで、昂奮した声を立てた。そして眼鏡を受取つて、船尾に去つてゆく島の頂きに焦点を合せた。

「あつ！ 人だ。人が死んでいる！」

二人はじつと顔を見合せた。

どうする？ と言う風に、南波の眸には激しい色が浮いている。

咄嗟に沼野警部は思案を定めた。そして慌だしい足取りで、船長の姿を求めて、甲板を走り出したのである。

陽焼けのした頬を曇らせて、船長は一瞬、二人の緊張した顔を見返した。が直ぐ、双眼鏡に眸を当てると、指されるほうを眺めた。

運転士も同じように覗く。そして顔を歪めた。

「如何にも、仰言る通りですな。しかし……」

船長は明らかに迷っているらしい。この船の予定を遅らしてまでも、あの無気味な島の、人の屍骸

とも見える、鳶の餌を確かめなければならぬだろうか——。それがこの船長を迷わせたのに違いない。

がそれも瞬忽にして、運転士は機関部員に船長の命令を伝えた。非常汽笛が遊覧客を驚かして、船は全速力で後退を始めた。そして急にリズムミカルな機関の音が途絶えると、船尾から白い泡沫がブクブクと盛り上った。煙突から白い蒸気が、激しく吐き出された。かくてついに遊覧船は、海の公園の真只中に、ポツンと立ち止まったのである。

第二章 白昼の無残絵

漕ぎつけて見ると、島は思ったよりも大きかった。それに船から眺めていた時は、岩ばかりで、うてい登れそうにもないと見えていたのに、近附いて見ると、急勾配ながら、白い砂浜があった。しかも、砂はあたかも米粒の如く、白く粗く、粒も揃っていた。

人の姿を見てか、鳶がまたも羽音高く飛び立って、再び上空に輪を描き始めた。

砂浜は直ぐつきた。急勾配を登りつめると、荒んだ岩肌が、巍然と聳え立っていた。遠くから見ると、墓碑のように見えたのも、この岩が白く、角柱の如く、削り立っているからなのに違いない。が岩質は脆いらしく、手を触れると、直ぐホロホロと欠け落ちた。

「この岩の頂きでしたね」

警部は肥った腹にバンドを締め直して、弱ったように仰ぎ見た。

「うむ、そうらしいね。だが直ぐ登れるよ。そら階段が刻まっているじゃないか——」

全く岩肌には、階段が刻まれていた。で南波が先頭に立つて、沼野に二等運転士、そして船員が一人続いた。

岩の高さは五十尺もあつただろうが、が、やつとの事で、一同は頂上に達する事が出来た。

一同はすっかり汗を掻いていた。沼野警部などは、息をきらして、ハアハアと喘いでいた。だが一目、彼等が岩上に見出した光景は、一瞬にして、それらを忘れしめるに充分だった。声もなく凝然と立ち竦む、余りにも怖ろしい光景が、其処に展開していたのだ。

だが、それにしても何と言う白昼の無残給だつたらう！

南波は十坪許りの岩の頂きから、遊覧船の赤い船腹を眺めた。白く塗られた美しい船室と、甲板の上に黒くなって此方（こなた）を眺めている遊覧客の姿を眺めた。

マストに大阪商船の旗が、翩翻（へんぱん）と風にはためいている。ポーウと又しても、汽笛が響く。夢では無い。たしかにこれは現実の出来事だ。だが……。だが、ああ！

南波はもう一度、殆ど骨までつつかれた屍体の顔を見た。眼窩が黒く血に塗れて、落ち窪んでいる。鼻の形も悪い。ただ金を冠せてあるらしい歯が、崩れた肉の間から、眩しくキラキラと光っている。

陽に照らされて、血は黒く乾いている。咽喉（のど）の附近にも、白い骨らしいものが見える。黒い髪の毛が、屍体から離れて、散乱している——。

若い船員は、両手を高く挙げて、汽船に向つて何度も何度も狂人（きやうじん）のように打振った。そして、今度は蒼白（そうはく）んだ頬に両手を当てて、

「おうーい。人殺しだぞうー、女が殺されているぞうーい」と叫ぶのだった。

屍体はまだ生々しかった。顔や手首をつつかれているので、年齢の程は判らないが、着物は確かに中年以上の女が着るらしい、地味な縞柄の、茶がかったものだった。帯も、くたびれた灰色の昼夜帯で、ただ白い足袋たびがいたずらに白々として光を弾き返していた。

沼野警部は、早速と運転士に尋ねかける。

「船には無電の設備がありますか？」

「はあ！」

「じゃ、貴方あなたは直ぐ本船へ戻って、丸亀の警察へ、この由を報告してください。殺人事件だから、一切の準備をして、この島まで即刻来るようにと……。それから、僕の名も言って置いて下さい。刑事課の沼野が、現場で待っているから、とね」

運転士は頷いた。そして南波の顔を顧みた。その眼は明白に、貴方はどうします？ と訊いている。

「僕も残りますよ」

はつきりと南波は言った。久方振りの興奮が、彼の身内に、ぞくぞく湧き立っていたのである。

一目で警部は、そうした南波の意図を見抜いたのだろう。

「久しぶりで御指導して頂けますね」と嬉し気に微笑むのだった。

一度下りかけた運転士は、慌てて再び声を掛けた。

「あの、この島は、何と言いましたっけ？」

「真木島まきじま、真木島ですよ」

「あ、そう、そうでしたね」

運転士と船員の姿は消えた。と間も無く、小さな端艇が、遊覧船目掛けて、漕いで行くのが見えた。「とうとう、二人きりになりましたね。しかも、海の公園の真中で……」

沼野警部は今しも動き出した汽船を見送りながら言った。佻^わしげな声である。

遊覧客達は歓呼に似た声を挙げながら、しきりと手や帽子を打振っている。南波もそれに応えて、手を振りながら頬に軽い微笑を湛えた。

「——でも、十年振りでお眼にかかれた楽しい日に、こんな不祥な事件が起るなんて……」沼野警部は如何にも怨めしそうだつた。

しかし南波は激しくそれを打消した。そして改めて沼野警部の姿を、頼もしげに眺めながら、「随分久しい間、君と一緒に働いたことはなかったね。しかし、僕は何時^{いつ}も想出していたよ。二人が力を併せて、難かしい事件の捜査に当った昔をね。——だから、今日久し振りで逢った時に、こんな事件にぶつかるといふのも、君、決して偶然じゃないのかも知れないぜ」と言うのだった。

沼野は南波がまだ警部補だった頃、その下で巡査部長をしていた。

この二人は不思議な程意気が合った。だから、沼野も南波の下で働き始めてからは、めきめきと腕を上げた。そして南波が名捜査課長として、卓絶した手腕を謳われる頃には、沼野は特に望まれて、四国の門戸、高松の警察に籍を移し、南波仕込みの手腕を振って、たちまち素晴らしい名声を得た。だから南波が惜しまれて課長の椅子を去る頃には、沼野は香川県刑事課で、枢要の椅子を占めていたのだった。